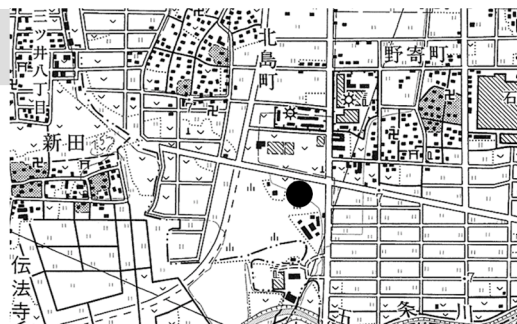


ごんげんやま
権現山遺跡

所在地 岩倉市北島町・野寄町地内
調査理由 五条川右岸流域下水道事業
調査期間 平成13年6月～10月
調査面積 2,350 m²
担当者 石黒立人・鶴飼雅弘・早野浩二

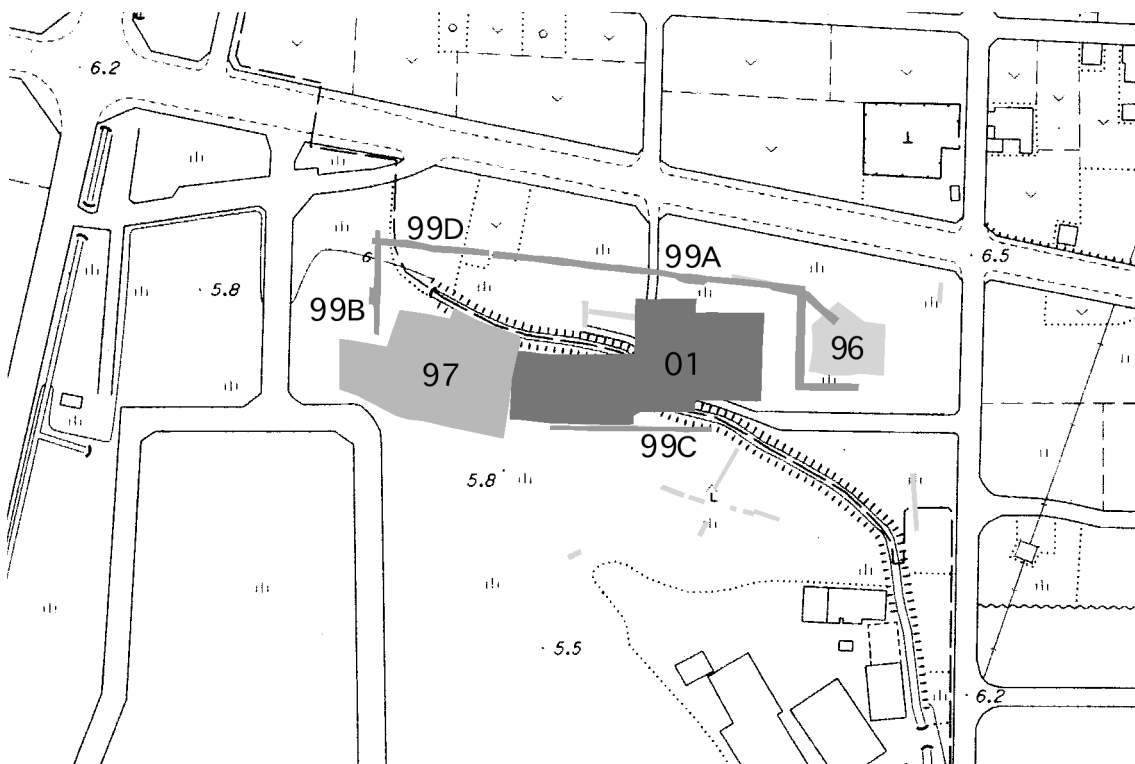


調査地点 (1/2.5万「一宮」)

調査の経過 権現山遺跡は岩倉市南西部の北島町・野寄町地内に位置する。本遺跡の調査は五条川右岸浄化センター建設の事前調査として、これまで平成8年、9年、11年にわたり行われてきた。本年度の調査はスクリーンポンプ棟建設に伴う事前調査として、愛知県建設部下水道課より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、2,350 m²の発掘調査を行った。

立地と環境 本遺跡は五条川右岸の標高7 m 前後の自然堤防上に立地する。遺跡の約0.3 km南には伝法寺野田遺跡、約0.5 km北西には元屋敷遺跡が近接し、周囲には三ツ井遺跡、猫島遺跡、大地遺跡、三ツ井稲荷山古墳、西春高塚古墳、伝法寺本郷遺跡、伝法寺廃寺、薬師堂廃寺など、弥生時代から古代にかけての遺跡が集中して存在する。

調査の概要 今年度の調査区(01区)は96区と97区に挟まれた地点に相当する。今回の調査では97区で確認された縄文時代後期の遺物包含層と遺構群が01区西部にまで及んでいること、古墳時代初頭と古墳時代後期の墓域が96区から01区、97区にかけて広範囲に展開していることなどが明らかとなった。しかし残念なことに、調査区には廃材を処理した攪乱坑が各所に散在し、多くの遺構が破壊を被るといった状況であった。



調査区配置図 (1:2500)

縄文時代後期 縄文時代後期の遺構として調査区西部において竪穴住居3棟（S B 02～S B 04）などを検出した。ただし、それらは古墳時代や近世の遺構と複雑に重複し、遺構の認定はきわめて困難な状況にあった。それらのなかで特筆される遺構として、S B 02 内において確認した石器製作に関連する土坑（S K 71）、土器片敷遺構（S K 73）がある。S K 71 は長径約 0.6 m、短径約 0.4 m の長楕円形の土坑で、下呂石のみからなる剥片が集中して出土した。S K 73 は径約 1.5 m の不整円形の土坑で、破碎された粗製無文深鉢が土坑底面からやや浮いた位置に敷かれた状態で出土した。なお、竪穴住居群以東では明確な遺構は確認されないが、小河川状の緩やかな落ち込みには、遺物がやや集中して出土する地点が認められた（S X 04、S X 05）。

古墳時代初頭 今年度の調査で確認された古墳時代初頭の遺構には方形の墳丘墓4基、竪穴住居1棟がある。これで墳丘墓は97区と併せて計5基（墳丘墓1～墳丘墓5）が確認されたこととなり、これらの墳丘墓は東西100m以上にわたって、一定の間隔を空けながら列状に配置されていることも明らかとなった。97区と01区にまたがる墳丘墓2（S D 64）は墳丘部分の一边が約18mと大型で、周溝も幅約5m、深さ約1.5mを測るかなり大規模なものであった。加えて墳丘側がかなりの急傾斜であることも印象的である。それぞれの墳丘墓の周溝内各所では、3世紀後半を前後する土師器壺、高杯などの出土がみられた。なお、埋葬施設は確認されていない。

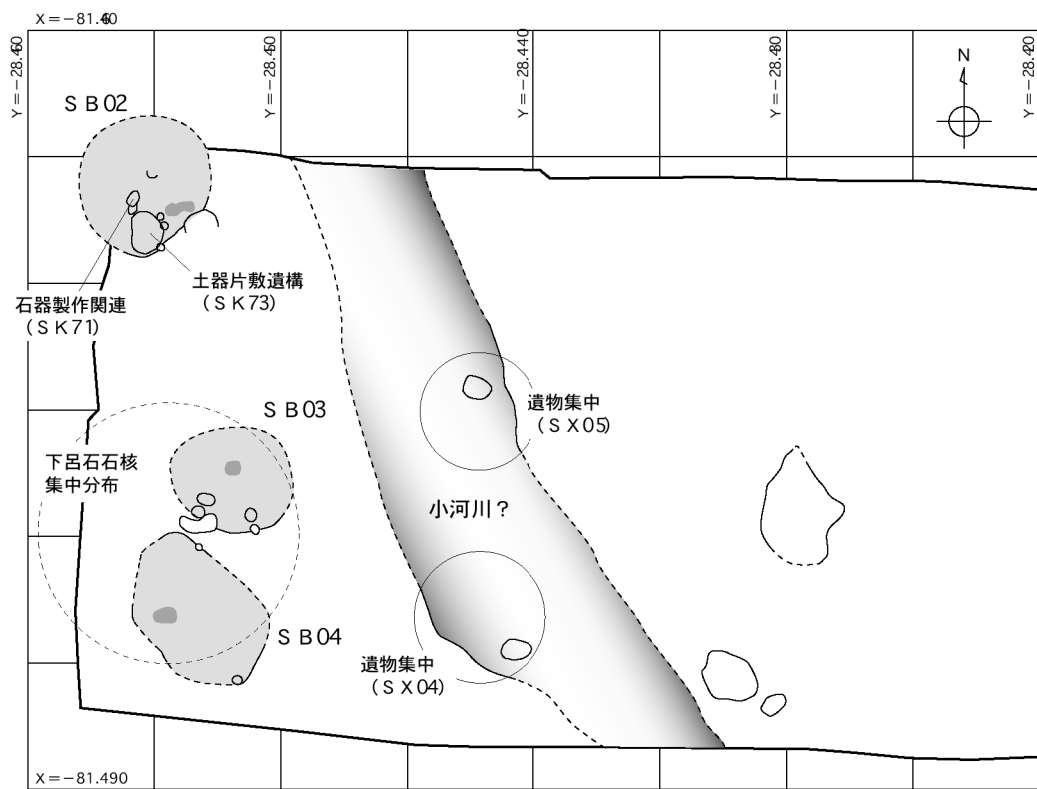
墳丘墓4と墳丘墓5の間に配された竪穴住居2（S B 01）は、周溝状の貼床をもつ構造で、支柱穴と地床炉も明確に検出された。墳丘墓群との重複関係が存在しないこと、墳丘墓群と同時期の土器が出土していることなどから、墳丘墓群にかかわる施設としての可能性が有力視されよう。

古墳時代後期 調査区の南東部で、円墳の周溝（S D 08）を検出した。これは遺構の形状や位置関係などから96区南西部において検出された溝（96区S D 08）と同一の遺構と判断される（円墳4）。円墳の規模は径約25mに復原され、周溝からは6世紀前半の須恵器壺が出土した。なお、円墳4の周溝は墳丘墓5の周溝を避けるようにして掘削されていることから、古墳時代後期においても、古墳時代初頭の墳丘墓群は削平されずに残存していたことが推測される。

古代・中近世 古代の遺構として8世紀後半の溝が数条、中世の遺構として土壇墓の可能性が高い円形土坑などが散発的に検出されている。近世の遺構は区画溝、土坑などが比較的濃密に検出され、区画溝からは陶磁器をはじめとする遺物の出土も多い。一方で井戸は検出されなかったことから、01区は屋敷地（97区）の周辺に相当するものと考えられる。

ま と め 縄文時代の遺構群が尾張平野低地部において発掘調査された事例は皆無であることから、本遺跡の調査成果は当地域の縄文時代研究に大きく貢献するものとなるだろう。また、遺跡の時期もこれまで資料が希薄であった縄文時代後期初頭から後期前葉を充足するものであるだけに、その資料的な価値はきわめて高い。

古墳時代初頭には、本遺跡は大型の墳丘墓のみから構成される墓域であった可能性が高い。古墳時代初頭における墓域の構成、景観を具体的に知ることのできる資料として貴重である。また、この墳丘墓群を造営した集落が周辺の遺跡に存在した可能性が高いとすれば、近接する元屋敷遺跡との関係が重要となるであろう。（鵜飼雅弘・早野浩二）



01 区西半縄文時代後期遺構配置図



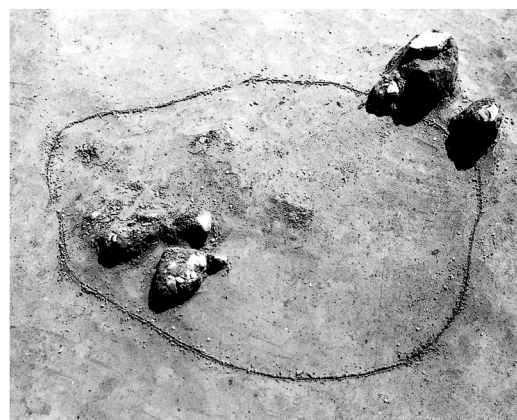
縄文時代後期の遺構



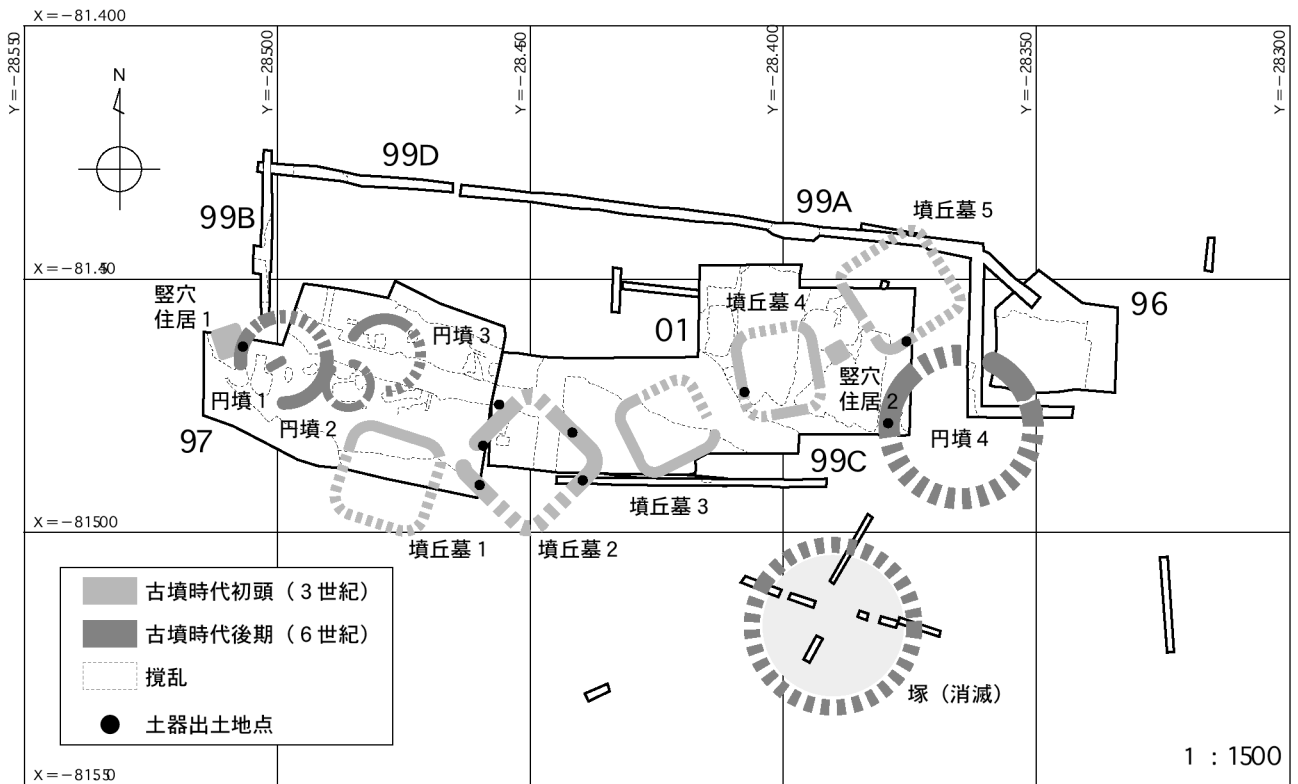
SB02



土器片敷遺構 (SK73)



石器製作関連 (SK71)



墳丘墓 2 (手前) と墳丘墓 3 (奥)



墳丘墓 2 の周溝の断面



墳丘墓 2 の土器群



墳丘墓 5 (奥) と円墳 4 (手前)